

静岡県現代俳句協会会報

No.133

令和4年12月25日発行



現代俳句の常識・基本の一考察

植田 密
静岡県現代俳句協会特別顧問

金子兜太亡き後、現代俳句の主たる作家が「花鳥諷詠Ⅱ写生」に傾きつつあるのが見え心配している。一方、黒田杏子は兜太の意志を継いで「戦争・災禍」を取り上げ、長谷川權にもその傾向が見える。「日経・朝日・読売」の各紙の俳句選でも、兜太的詩美を気に掛けているようだ。地方某紙では、石寒太（現俳協）が「雪・月・花」と称して一位〜三位を決めている。新聞社側の意図と思われるが、選句自体も「花鳥諷詠」と、私は看破している。ご存知のように高濱虚子は「客観写生」でない俳人をすべて除名した。飯田蛇笏・村上鬼城・杉田久女・原田濱人らである。芸術とは「自然

や対象の人間の個性的把握詩美である」はずである。絵画のピカソが「青の時代」から次々と変容し「キュービズム」の「ゲルニカ」を描き、人間の個性的（社会的）詩美を呈示した。書道・華道他の芸術も「写生（万葉調）」を離れ「思い・思索性（古今調・新古今調）」を求める詩美を表現しようとしている。俳句の詩美には「小説・物語性のある余情Ⅱ石田波郷・久保田万太郎・高柳克弘らの物語性、ドラマ仕立て（六月の女すわれる荒筵）」、「テーマ性・エロスの哀しみ・死生観Ⅱ斎藤 玄・大西泰世・橋本多佳子（雄鹿の前吾もあらあらしき息す）」他がある。金子兜太らが行った俳句革新は

「西洋の近代詩的モダン」である。虚子の自然の「美しい詩美だけ詠う」態度と異なる。世の中の汚濁・人間生活の苦しさ悲しさ、それを乗り越える俳句的詩美に着目する姿勢なのである。加藤楸邨は昭和十年「真実感合」の道を呈示し、人間探求派として「寒雷」を創刊した。ホトトギスでも中村草田男が「哲学的思索」「季語の二重性」の呈示のもとに、人間の思索・生活的一体心象句を表出した。兜太は草田男（萬緑）の句会で作句の方向性を学び、楸邨の寒雷で作品発表をしたのである。これらの経緯を熟慮して方向を定めなければならぬ。退化でなく、進化が私達の務めなのである。次に「韻」について一考する。韻は「芸」「遊び」である。芭蕉没後「蕉風」が力を失い「談林」が復活した。その余勢で「貞門」の立羽不角が「化鳥風」を興した。掛詞縁語を使用し、意味性を持たせ韻を踏んだ。その名残りが「韻の芸」で「俳句性とは異なる」。最後に「歳時記は一オクターブできてきている（角川大歳時記）」。「ピタゴラスの数は2・3・5・7・12、白鍵7音黒鍵5音計12音。一年は12ヶ月24節気、時計は12時一日24時間、一ダースは12本。定型の詩美はこれらを考え進化したい。

諸家近詠

秋の庭

静岡市 井上 花風

秋の蝶土の匂いの近くかな
思いきり飛んだつもりの飛蝗かな
母を抱く腕のぬくもり十三夜

冬の薔薇

浜松市 植田しづ子

履歴書を書き直し咲く冬の薔薇
毳つき唄にこつと笑ひ姉目覚む
湯の宿に除雪車すでに待機せり

稔田に

浜松市 鈴木 邦子

黒猫の深き眠りや野分後
稔田に家の雀は行つたきり
釣瓶落し憶良は家路目指しをり

秋日和

焼津市 阿久津明子

武器よりもこの秋日和届けたし
コロナ禍に生れすこやかに七五三
朝より非通知電話そぞろ寒

百年時代

焼津市 長谷川尚美

斑鳩の空に梵鐘雁渡る
逍遙に詩心生る大花野
晩学の百年時代天高し

秋深む

焼津市 猪野 澄子

夕闇に白の浮き立つ酔芙蓉
ゆつたりと流るる河川秋深む
青天に我が身をさらす枯木かな

暮の秋

浜松市 高部 宗夫

秋惜しむ母の手提げにニツキ飴
秋深し白杖の子の指の先
朝市に振舞ふあら煮冬近し

余滴

静岡市 近藤甚之助

捨て本の紙紐固く罌雲
綿虫やときに烈女の襟足へ
孫の手の竹冷えびえと妻の留守

わが俳句工房 (96)

句会

静岡市 宮下 艶子

元来、私は考えることが苦手である。

物を凝視する力も想像力もない。およそ俳人には向いていない。そんな私を育ててくれたのが句会である。ふとしたことからご縁をいただいた俳句であるが、あまりにも無謀であった。歳時記を手にしたこともない。それを手に入れるのにも師を頼った。句会へ出席しても読めない字が多く、わからない、知らないことばかりで、出席しているだけという有様であった。「句会は恥をかくところ」師の弁に救われる思いがあった。こんな状況でも句会が嫌になったことはない。無知な私を見兼ねて関係の本を下さった方、ノートを見せて下さった方、いつも声をかけて下さった方々。そのような皆さんのもとでの句会である。句会が嫌になろう筈もない。多くのことを学ばせていただいた。現在も先輩に、又、若い方の瑞々しい感性に刺激をいただいている。この先も健康に留意して一回でも多く句会に出席したい。「わが俳句工房」へ。

一句鑑賞

前号の「諸家近詠」の中から

平らげる天安門の日の餃子

花房 なお

静岡市 大石 恒夫

餃子の句と言えば「餃子喰って夜学教師となりけり」を思い出す。湘子は夜学の教師になってしまった事が、無念だったに違いない。ひるがえって1989年6月4日の、天安門事件を境に、中国は自由な国から、軍事大国に変わっていく。作者は餃子を平らげる事しか出来ないと言う。時事句が破調の詩になった一句である。

蟻地獄覗けば古書の匂ひせり

花房 なお

静岡市 山本まさゆき

蟻地獄は、歳時記に例句が多いが殆どは古いもので、昔ほどには日常的に見かけるものではなくなつたはず。しかも、覗いたところで捕食している景は希であろう。蟻地獄は正しく古書の中のものなのかもしれない。作者は実景からそれを直感的にしかかも匂いとともに想起した。おそらく即吟。平穩にして鋭敏な感性である。

ぐんぐんと我を忘れし雲の峯

秋本惠美子

浜松市 尾内 以太

「ぐんぐん」は長いスパンで夏空の景を捉える。寝々たらんと無我夢中に膨らむ雲の峯が上へのぼる過程で下に「我」を置き忘れたと述べるならば地にある作中主体たる我へ「我」は字面上で接近する。その接近は物理上の両者の接近をも許しやがて二つは夏の果てで融合する。雲も我も神の様に他ならない。

雨といふ最高の贅七変化

池谷 晃

静岡市 土屋 悦子

今夏の梅雨はあまり降らず、天気予報の梅雨明け宣言が出たりして紫陽花も冴えない色で終わる？こんな感じでいたら線状降水帯とやら耳慣れない言葉と激しい雨が続き、ドライフラワー状態の紫陽花も息を吹き返し花は飲んでも人間の生活は厳しい夏に振り回された年でした。雨に喜んで紫陽花を一句に詠む作者の素直さを感じました。

エッセイ

うしろ姿

富士市 風岡 俊子

今日の富士山はみごとな雪化粧富士である。昨夜の寒気で一夜にして冬を運んできた。宝永山まで白く包まれ、数本の雪渓は美しい。わが家の庭をあちこち移動し、雪富士全姿をしばし眺める。冬の季節の到来である。ふと、心に遊ぶ種田山頭火の俳句が浮かぶ。まつすぐの道でさみしいしぐるるやしぐるるや山へ歩み入るどうしようもない私が歩いてゐる握りしめる手に手のあかぎれ雪へ雪ふるしづけさにゐるしぐるるや死なないでゐるうしろすがたのしづれてゆくか自分のうしろ姿を見ることは出来ないが、他者の眼を通して見ている。うしろ姿が時雨の中を歩いていく。旅を続ける山頭火自身が小雨の中を救しげにトボトボ歩く。うしろ姿は、つまらない存在であると軽蔑している。これまでの人生は時雨のようにパツとしない。どうして、こんな寂しい暗い人生を過ごしているのだろうか。と。私もふと、思う時がある。

新会員の紹介

ようこそ静岡県現代俳句協会へ

伊東市 内田 彩

白浪の八重に碎けて秋の虹

銀杏の風がせかせる雨催

吾が腕の保護色ならむ秋の蠅

〔事務局より〕

〔慶祝〕

俳句集出版おめでとうございます

村松 二本「月山」

角川書店 令和二年三月

後藤むつ子「風のとと」

文学の森 令和三年二月

友田喜美子「春の楊梅(やまもも)」

ふらんす堂 令和四年二月

伊藤 空

「俳句の宙2021精選アンソロジー」

本阿弥書店 令和四年二月

〔行事報告〕

①中部文学散歩

令和四年十一月五日(土) 駿府城公園を
吟行地として開催予定でしたが、新型コロナ
ウイルスの感染状況を踏まえて中止とし
ました。

②静岡県現代俳句協会役員会

日時 令和四年十二月三日(土)

午後一時三十分

会場 静岡市「あざれあ」

内容 令和五年度事業計画

役員人事について

〔行事予定〕

①静岡県現代俳句協会定期総会

日時 令和五年三月四日(土)

午後一時三十分

会場 静岡市「あざれあ」

※総会終了後、一句会を開催します

編集室からのお願い

次号一三四号(令和五年四月発行の予
定)の執筆予告をさせていただきます。
ご協力の程、お願い申し上げます。

執筆予告(敬称 略)

○巻頭随想

会長

滝浪

武

○わが俳句工房

○エッセイ

○諸家近詠

植田 密・植田 次男・金子 徹

菅原 春み・杉山 水音・鈴木あさ子

駒田 一草・杉山 和子・久遠 靖晴

○一句鑑賞(今号一三三号)の諸家近詠
の中から一句選び鑑賞文をお願いいた
します。

貫名ともみ・山本 敏子

内藤小夜子・村松 二本

詳細につきましては、別途、該当の方
宛に令和五年二月、連絡させていただきます。
ます。

今号は、中部文学散歩の中止により、
記事が少なくなりました。会員の皆様には、
諸家近詠、一句鑑賞等いつもご協力
いただき感謝申し上げます。より充実し
た会報の発行に向けて、皆様からのご意
見をお待ちしております。どうぞよろし
くお願いいたします。(由)

静岡県現代俳句協会会報 第一三三号

発行 令和四年十二月二十五日

発行人 滝浪 武

編集人 田中 由美子

事務局 つげ 葉子

〒435-0034 浜松市南区安松町六三一一
電話FAX 〇五三-四六二-〇五〇八